

西南戦争余談

松村昌勝

(会員・佐伯市長良小島)

私の祖父松村勝三は西南の役の時西郷軍(薩軍)に味方して各地の戦闘に参加した。

「太腿に大粒の石ころを打ち込まれたような激痛におそわれた。」と後年になって負傷した時の模様を父に語ったそうである。

我が家はこの戦争の始まる直前まで熊本市京町(熊本城の北側)にあった。曾祖父は戦禍を予測して市内から植木町(当時は山本郡平野邑)といったが今は鹿本郡になる)に居を移した。そこは田原坂に近く、明治十年(一八七七)薩軍によって包囲され、孤立した熊本城(熊本鎮台)の救援に南下する官軍と、これを迎え撃つ薩軍が入り乱れての激戦を展開した所である。

乃木少佐(のちの陸軍大将乃木希典)率いる小倉十四連隊(救援隊の一つ)の旗手川原林少尉が戦死して軍旗を薩軍に奪われた。向坂も直ぐ近くにあり、国道三号線

には標柱が建っている。

だいぶ昔の話になるが、夕立や豪雨のあとなど、近くの田舎道を歩いていると、この戦いに使用された鉛の弾丸が洗い出されているのをよく見かけた。私は子供心にも生々しい戦いのあとを偲び、大人の指先程の弾丸やその破片に興味を持って拾い集めたものである。

西郷軍の挙兵に対して熊本県下の人々は、薩軍に投ずる者やあるいは政府側に協力する者などあったが、祖父は池辺吉十郎指揮する『熊本隊』に加わり、『竜口隊』『熊本協同隊』『人吉隊』などと共に薩軍に味方した。

熊本隊はこれら協力隊の中で最大の兵力を持った部隊であった。

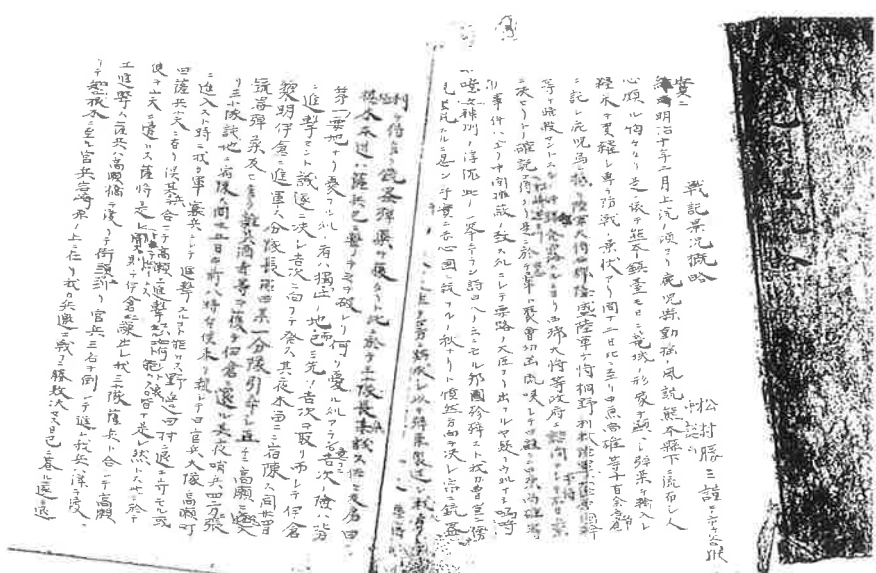
二月二十二日熊本隊は市内健軍神社で部隊を編成し出陣式を行ない、薩軍本隊に合流して直ちに戦列に加わった。

一方、熊本から植木街道(国道三号線)を北上した薩軍は二月末から四月上旬にかけて、第二の田原坂とも云われた吉次峠の直ぐ近くに位置する木留に本営を設置した。ここは、九州西岸を南下して熊本城の救援に向かう官軍を阻止するための戦略上重要な拠点であった。

このあとには戦後祖父が獄中で書いた『戦記景況概略』に基づいて一部を紹介しながら、従軍した経路や負傷して官軍に降つた当時の模様などについて、詳しく述べてみたい。

（「仮名文字」のところは原文のまま）

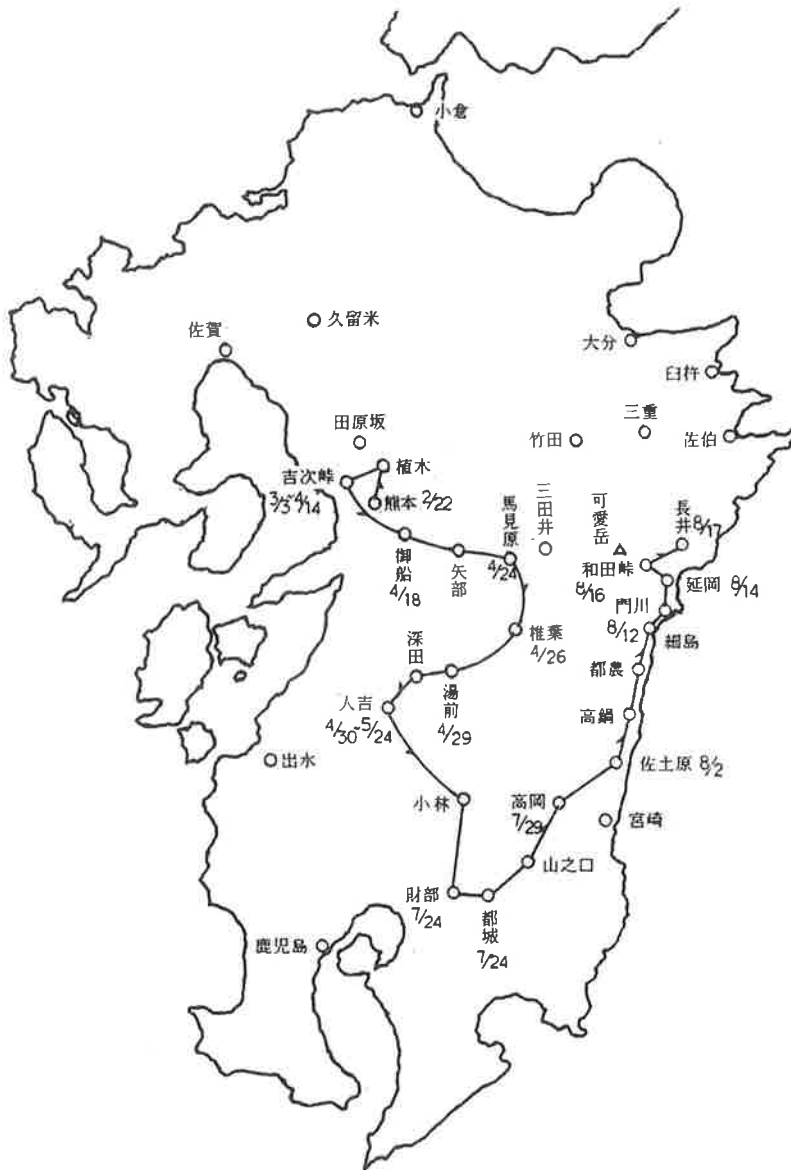
『三月三日午前七時官軍大挙シテ吉次二進撃ス 薩兵原藏村ニ邀工撃ツ 互ニ勝敗アリ 九時頃ニ至リ官兵兵ヲ更テ迫リ撃ツ鋒サキ甚鋭ナリ 午後三時頃ニ至リテ官兵左右翼ヲ張りテ攻撃ス 其勢破竹ノ如シ薩兵辟易（たじろぐ） 隊長佐々友房兵士ヲ指揮シテ本道ノ臺場ヲ死守ス 五番小隊長三宅新十郎耳取間道ヲ守リ奮戦ス 両道ノ勢 甚急ナリ 薩將篠原国幹等本道ニ有リ刀ヲ揮イテ兵士ヲ指揮ス 熊本隊參謀山崎定平我が隊長佐々友房我が軍監高島義恭等 本道ニ在リテ憤激兵士ヲ指揮シ周旋（立ち回る） 最トモ勤ム 佐々友房薩將ニ謂フ 曰ク若シ此ノ險地ヲ捨テハ熊城ニ至ル迄防グベキノ地ナカルベシ 共ニ死ヲ以テ此ヲ守ラント 薩將土橋某モ本道ニ在リテ兵士ヲ指揮ス佐々友房薩ノ隊長土橋等ト計リテ兵士ヲ四方ニ開散シテ禦ギ止ムルコトヲ得タリ 五時頃官兵ノ勢 益鋭ニシテ頻



獄中記 『戦記景況概略』

熊本隊進路図

明治10年2月22日～8月17日



リ二大砲榴弾ヲ発シ砲聲ヲ聞聲地ニ轟ロキ山嶽為メニ崩レントス 薩肥ノ兵死傷頗ル多シ 夜ニ入り敵ノ進撃間斷ナシ 同四日黎明ヨリ官兵益迫リ撃チ戦イ尤モ激烈ナリ 午前十時頃ニ至リ官兵進テ耳取越ニ迫ル 五番小隊三宅新十郎奮戦 兵士ヲ指揮シ創ゾ三ヶ所ヲ受ケ衆寡敵セズ遂ニ敗レ退ク 我一番小隊ハ終日終夜ノ戦イニテ兵士大ニ疲勞シ且ツ糧食繼カズ 銃器多ハ破損シテ用ユルアタワズ故ヲ以テ薩ノ援兵ト臺場ヲ交代ス 薩兵左右翼ヲ張り掩フテ之ヲ撃チ官兵遂ニ巡(しりごみ)ス 薩兵忽チ耳取ノ壘ヲ復ス 此時本道ノ戦イ益激シク午後一時ノ頃ニ至リ官兵潰敗ス 薩兵勢ニ乗テ進撃官兵狼狽銃器兵□道路ニ遺棄シ 伏屍六十名屍山中ニ狼藉(散らす)タリ 此ノ役ニ篠原国幹戦没セリ 午後三時田原ノ戦イ急ナルヲ聞キ 參謀山崎定平我ガ一番小隊ヲ引率シテ田原坂ニ趣ク 薩兵能ク拒セギ戦フ 我方隊那智村二陣ス 同五日吉次ノ壘ヲ修メ戊兵(番兵 國境を守る兵士)ヲ置キ伊倉本道ヲ守ル

池辺吉十郎ハ是レヨリ先寺田ノ役ニ創ツキ春日村某ノ宅ニ在リテ之レヲ療治ス

三月四日—二十日 田原坂大攻防戦

三月十八日 田原坂で悪戦苦闘を続けていた政府軍は衝背軍を編成し、船で八代に上陸、熊本籠城軍救出のため南から進撃するという情報を薩軍本営がキャッチした。

四月八日 祖父は斥候を命ぜられて熊本本営に向け木留を出発した。そしてその日「熊本城の官兵は白川安政橋より水前寺・健軍・六嘉村へと進み、緑川を渡つて南方からの衝背軍と合流す。」との状況を薩軍本営に報告している。

四月十四日 三月十九日八代に上陸した政府衝背軍は各地に激戦を展開しながら徐々に北上を続け、一部は川尻を突破して市内に進撃し、遂に熊本城内の籠城軍救出に成功した。この日から薩軍は不利な戦況に転ずる。

四月十五日 川尻において大敗し熊本隊全軍木山(上益城郡益城町)に退く。

四月十七日 薩肥の兵二十小隊合流して御船(上益城郡御船町)に進軍する。

四月十八日—二十四日 御船の激戦で熊本隊死傷者八十名を数える。この時祖父は右腕に銃創を負った。味方

は全軍矢部（上益城郡矢部町）に退去。負傷者は悉く馬見原病院（熊本・宮崎県境 阿蘇郡蘇陽町）に向かう。

四月二十五日

馬見原より椎葉（宮崎県東臼杵郡椎葉村）を越え人吉（熊本県人吉市）に向かう。この間悪天候に阻まれ艱難辛苦の末、漸く四月三十日人吉城下に達する。

『五月上旬山野・深川（熊本県水俣市）・矢筈嶽（熊本鹿儿島県境）ノ戦ヒ 余出張セザルヲ以テ略ス 五月中旬人吉病院ニ入院ス 五月下旬ニ至リテ四方我軍悉ク利アラズ遂ニ人吉ヲ退ゾキ日州都ノ城ニ至リテ入院ス 六月上旬久木野（熊本県水俣市）及ヒ小河内（鹿儿島県大口市）ニアル肥薩ノ兵退ゾキ大口ヲ守ル 七月二十四日余創全快スルヲ以テ帰隊ス 財部（鹿儿島県曾於郡）ノ内十文字臺場ニ至ル 此ノ日熊本本営ヨリ半隊長代理ノ命アリ』

この頃から薩軍と熊本の各隊は九州東岸を北上することになった。しかし、都城・庄内・山之口・高岡（東諸県郡）と進むにつれて味方の弾薬は盡き、鉛錫も無くなり鉄を鑄て弾丸とし、食糧も少なくなつた。

八月二日

佐土原（宮崎郡）北方において中隊長佐々

友房が傷を負う。生死不明なる者は十数名にのほつたという。一方、本隊は高鍋・都農（児湯郡）を経て北上、美々津川（耳川）を渡り五日細島（日向市）に進撃、八日熊本隊は全軍門川（東臼杵郡）に向け進発した。

『十四日午前三時門川口ノ軍ヲ揚テ再ビ延岡ニ帰ル 三田井ノ官兵黎明ニ延岡ニ進入ス 人民狼狽負擔逃走ス 我ガ中隊是ニ応ジテ戦フ 中隊長可児才八創ヲ負イ 衆寡敵セズ遂ニ熊田（東臼杵郡北川町）ヲ指シテ退キ和田越（北川町和田峠）ノ要地ニ據ル 官兵進撃シテ和田越ニ来リ 一軍ハ無鹿本道ヨリ攻撃ス 我兵邀撃ツ 官軍大砲榴丸ヲ発シ我兵防セギ戦フ 晡（日暮れ）ニ至リ止ム 同十五日薩軍悉ク豊後口ノ奇兵（奇妙なばかりごとで 揚ゲテ 勢猛烈隻手（片手）ヲ以テ延岡ヲ抜カントスル勢ナリ 而シテ専ラ右翼ヲ張り進撃ス 官モ亦タ右翼ヲ張りテ進ミ戦願ブル激烈ナリ 我ガ大隊長山崎定平奮激兵士ヲ指揮シ遂ニ重創ヲ負フテ退ゾク 之ニ因テ兵氣大ニ阻ム 午後二時味方ノ軍敗レ退キ死傷甚シ 此ノ日余モ亦右之股ト腕ト二ニケ所ヲ傷ツキ病院（長井村）ニ入院セリ』

『十六日夜衆議ス 我軍刀折レ彈盡キ身ハ傷キ馬



刑期を記載した文書
(熊本城天守閣藏)

今年五月二十二日、佐伯史談会が例年行なっている岡の谷招魂所清掃作業のため私は初めてここを訪れた。そこに建てられている「敵愾」と大きな自然石に刻まれた記念碑の前には、百四十八柱の墓石が整然と立ち並んでいる。今から百七十年前、我が国最後の内乱に殉じた将兵は、遠く東京・千葉・石川・和歌山などの出身者もあれば、近くは広島・山口・福岡・宮崎・熊本をはじめ地元大分など、全国津々浦々からの参戦者である。苔むした墓石には、戦死した場所や病院名まで細かに刻まれている。

私は中学生の頃、友達を案内して田原坂の古戦場や記念館、それと今なお弾痕の残る家などを何度も訪ねたが、

その近くには立派な官軍墓地があり、広島鎮台の兵士が多かったことを覚えている。

当時薩軍はいわゆる「賊軍」であり、共同墓地など造ることさえ許されなかった。その後熊本市の東北龍田山の麓小峰の丘に、明治十年の干支に因んで「丁丑感奮碑」が建立され、毎年薩軍関係者による慰霊祭が行なわれている。

清掃の日持参した冊子、NHKの大河ドラマ「翔ぶが如く」を史談会の先輩S氏に披見した。

この本には西南の役の詳細な記録と解説があり、私の祖父勝三に対する裁判所の判決文の書状が掲載されている。私は祖父がこの戦いに薩軍として従軍し、熊本・鹿児島・宮崎の山野を転戦したということ話を話したところ、早速翌二十三日S氏の案内で古戦場巡りをすることとなった。

往路は蒲江町最南端の漁村波当津から県境を越え宮崎県北浦町へと向かう。

西南の役も終盤に近づいた明治十年七月中旬から八月中旬にかけて、この附近一帯は官薩両軍の山岳戦による死闘が繰り返された所である。標高四三〇米の陣ヶ峰展



展望台への道は良く整備され、三六〇度の大パノラマは実に素晴らしい。背後には激戦が展開されたという津島畑山、三川内が手に取る様に見える。豊後水道には大分県最南端の深島、眼下に波当津漁港、右手遙か延岡市の島ノ浦島が望まれる。

展望台の一隅に真新しい供養塔を見つけた。この塔は佐伯岡の谷招魂所に鎮まっている石川県出身の中西太平遊撃兵士の一族が、遠く故郷の能登半島に向けて建てたものだという。

津島畑山付近の死闘

明治十年七月十五日から翌七月十六日にかけて北浦町津島畑山を中心として薩軍と官軍による激戦が展開された。津島畑山は、大分県蒲江町と宮崎県北浦町の県境を分ける山脈であり、この歴史的な死闘は、この山帯が戰場となった。この戦いによる双方の損傷は、薩軍側が負傷した者四名、戦死した者四名となっており、一方、官軍側の損傷は死傷者合わせて五十数名にのぼると伝えられている。

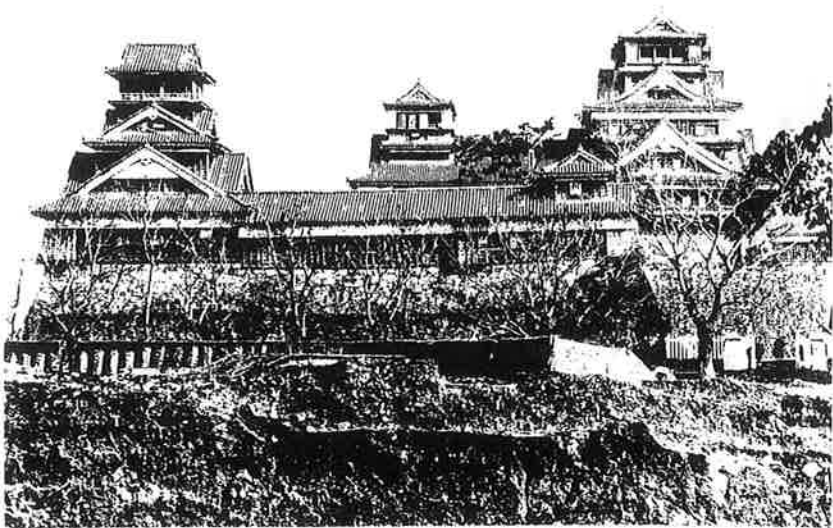
陣ヶ峰展望台の案内板



中西一族が建てた供養塔

復路では丸市尾へ下る車のフロントガラスに、故郷熊本の家に残されていた西南の役における死闘の錦絵が、走馬灯の様に浮かんで消えた。

このたびはS氏の御好意により、祖父が二十四歳の青



城本熊の前失焼

春をかけて打倒政府の理念に燃え、同志と進撃した想いの地を巡ることが出来て感無量であった。

次の機会にはこの町に隣接する北川町の古戦場を訪ね、熊本隊と最後まで行動を共にした竜口隊長中津大四郎自刃の地、長井神社に詣でたいと思う。又何時の日か祖父が負傷した激戦地和田峠と、薩軍が鹿兒島への逃避行を開始した峻嶮可愛岳よのたけも究めたいと願っている。

(註) 祖父は薩軍に加担した罪により東京市ヶ谷監

獄で二年の刑に服したあと帰郷、戦後は復興産業の一つであった養蚕業に従事し、明治二十九年から始まった郡議会では副議長、名誉参事会員などを歴任し、大正十五年天寿を全うして七十三歳で永眠した。

参考にした資料

- 1 佐伯招魂所墓碑調査書
- 2 植木町史(熊本県鹿本郡植木町)
- 3 戦記景況概略(松村勝三獄中の記)